17　「とりかへばや」　─中古の作り物語

18年度　立命館大学

★　次の文章を読んで、問いに答えよ。

　（大将〔女主人公〕が失踪し、尚侍〔男主人公〕はあることを決意する。）

　大殿には、忍びありきたまひしにならひて、「今日や今日や　Ａ　」と待ち暮らしたまふに、あらぬさまなるも尋ね出づることなくて、二月ばかりにもあまりぬるにぞ、「世を背きても、そこらさばかり尋ね求むるに、見聞きつけぬやうあらじ。はるかなる田舎などまでは㋐よにおはせじ。また、国々の境まで求めぬ所なし。中納言こそさしも思ひ寄らざら①め、心よからぬ使ひ人などは、『我が君のかくて心やすからず忍び通ひたまふ女、あいなし』など、やすからず思ひて、ひたぶるにゆゆしきさまにやしなしてけむ」とおぼし寄るにも、㋑ものおぼえたまはず。今は、恋ひ泣きたまひしことさへ絶えて、ほれぼれと臥し沈みたまひ②にたるを、殿のうち、またこれを嘆き扱ひ奉る。

　尚侍もまかでたまひて、ありし夕べ、のたまひしさまなどおぼし出づるに、「さは、かく㋒身を限りに思ひとぢめたまひけるにこそありけれ。かくと知らましかば、その夜出ださましや。我もろともにとこそ言ふべかり③けれ。幼かりしほどこそ疎々しかりしか、かく離れ出でては、出で入り、りりにも立ち添ひ扱ひたまひしこそ、我が身の光ある心地して、たのもしくうれしくおぼえしか。ただ二人ありつるに、行方なくなりぬるいみじさこそ。男のさまにて世に交らひしかど、思ひとくには、女のさまにて世に交らひたまひ④しかど、いかなる世界に行き隠れ、いづれの野山に跡を絶えたまふらむ。心あり、もの思ひ知り顔なりし君にて、女ながらかく思ひなりにたり。男の身となりおきにし身の、幼かりしほどこそ心ひく方にまかせても過ごししか、今はかくて過ぐるに、いつかれ埋もれたるは、いとあさましく心憂きことなり。殿の御身もいたづらになりたまふべきなめり。㋓我が御身は限りある御身なれば、尋ね求むべきにもあらず。人はただ、大方の世のひびきばかりこそ歩くめれ、まことに心に入れて尋ねぬにこそあめれ。また、いみじくとも、この世のにはいづちかおはせむ。我かくてのみあらじ。男の姿になりて㋔この君を尋ねみむに、いかなるさまにても、尋ね出でたらば、もろともに帰り来む。尋ね得ずなりなば、やがて㋕我が身もかたちをかへて、深き山に跡を絶えなむ。殿の御身には、人々おのづからうまつりてむ。年ごろ、女にていつかれつる身の、にはかにさし出でて、㋖て扱ひ聞こゆべきやうなし。ただかくながら、立ち遅れ奉りて、我が身の世にあるべきにもあらず」と、夜昼涙に沈みて、我さへただ消え失せなば、世の聞きもものぐるほし、殿におぼし言はむもいみじかるべければ、に心細げに聞こえなしたまひて、「㋗この人の行方知りはべらぬこと、あまたはべらねば、いとどいみじく心細くかなしきをばさるものにて、殿のむげにいたづらにならせたまひぬべきを、男の身にてただかくて見奉るなむ、いといみじくはべる。我もとのありさまになりて、この人を、心の及ばむ限り尋ねはべらむとなむ思ひはべる」と、例ならず、いとあるべかしうのたまふに、母上、「こはいかなることぞ」と、あさましくなりて、「いなや。いかなる御心がはりぞ。あえかに女のさまにてなり果てたまへる御身に、いづくと尋ねたまふべきぞ」と、ただ泣きに泣きたまふ。

注　大殿・殿＝大将、および尚侍の父。

　　中納言＝大将の恋敵と周囲から思われていた人物。

　　上・母上＝尚侍の母。

問１　　Ａ　に入れるのに、最も適当なものを、次のなかから選べ。

１　尋ね求めむ　　２　帰りたまふ　　３　参り上らむ

４　思ひたまふ　　５　世を背かむ

問２　傍線㋐の「よにおはせじ」、㋑の「ものおぼえたまはず」を、それぞれ現代語訳せよ。

㋐［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

㋑［　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　］

問３　傍線①の「め」、②の「に」、③の「けれ」、④の「しか」の文法的説明として、最も適当なものを、それぞれ次のなかから選べ。

１　完了の助動詞の連用形　　２　格助詞

３　過去の助動詞の已然形　　４　接続助詞の一部

５　推量の助動詞の連体形　　６　推量の助動詞の已然形

①＝［　　　］　　②＝［　　　］　　③＝［　　　］　　④＝［　　　］

問４　傍線㋒の「身を限りに思ひとぢめたまひける」の意味として、最も適当なものを、次のなかから選べ。

１　大将は自分の身もここまでと諦めておられた

２　大将は尚侍を見捨てようと決心しておられた

３　大将は自身の限界を超えるつもりでおられた

４　中納言は世俗から逃れる覚悟をなさっていた

５　中納言は今の地位を守り通すおつもりだった

問５　傍線㋓の「我が御身」、㋔の「この君」、㋕の「我が身」、㋗の「この人」とは誰のことか。最も適当なものを、それぞれ次のなかから選べ。

１　大将　　２　中納言　　３　大殿

４　尚侍　　５　母上

㋓＝［　　　］　　㋔＝［　　　］　　㋕＝［　　　］　　㋗＝［　　　］

問６　傍線㋖の「掟て扱ひ聞こゆべきやうなし」の意味として、最も適当なものを、次のなかから選べ。

１　自分が懸命に主張しても世間が理解してくれるはずはない

２　親のいいつけに従い家に戻るよう説得するしか方法はない

３　今更決まっているかのように言い聞かせることはできない

４　あれこれ指図しお世話申し上げることはできそうにもない

５　親の決めたとおりにおもてなし申し上げても役に立たない

６　この家の決まりを皆に無理強いする役割であるはずはない

◎問７　本文の内容に合致するものを、次のなかから二つ選べ。

１　大殿は、大将の所在不明が、恋における競争で敗れた中納言に、深く関係があると確信していた。

２　幼少時から絶えず一緒にいた大将が、姿をくらましたことが恨めしく、尚侍は出家を思い立った。

３　大将の失踪を知った尚侍は、女の身で男として世間に交わり続けた大将の苦悩を、自ら察知した。

４　大将がいなくなったことで、世間によくない噂が広まることをおそれたのは、尚侍だけであった。

５　尚侍は、行方知れずの大将を真に探し出せるのは自分だけだと思い、男姿になることを決断した。

６　母上は、尚侍が、大将を探すため宮廷での高い地位を捨てる覚悟であると知り、泣いて反対した。

【解答】

問１　２

問２　㋐＝Ａ決して Ｂいらっしゃら Ｃないだろう。

評価の基準　Ａ・Ｃが揃っていなければ全体０。  
　　　　　　Ｂを尊敬で訳していなければ減点３。

　　　㋑＝Ａ生きた心地が Ｂなさらない。

評価の基準　茫然自失の内容なら可。  
　　　　　　Ｂを尊敬で訳していなければ減点３。

問３　①＝６　②＝１　③＝３　④＝３

問４　１

問５　㋓＝３　㋔＝１　㋕＝４　㋗＝１

問６　４

問７　３・５

【現代語訳】

　大殿（大将・尚侍の父）は、（大将が、これまでも）こっそりと出かけなさっていたのに慣れていて、「今日は今日はお帰りになるか」と朝から晩まで待っていらっしゃるが、変わり果てた姿である大将も探し出すこともなく、二カ月ほども過ぎてしまったときに、「出家したとしても、これほど長く捜索しているのに、（何の情報も）見つけられず聞きつけられないはずはないであろう。はるか遠くの田舎などまでは決していらっしゃらないだろう。また、隣国との境まで捜索しなかった場所もない。（大将の恋敵と周囲から思われている）中納言もまさかそのようなこと（＝大将を暗殺すること）は思いつかないだろうが、性格のよくない（中納言の）手下などが、『私の主君（＝中納言）がこのように心を砕いてこっそりと通いなさる女（＝四君という、大将の妻であり、中納言が心を寄せている女性）は、（その夫である大将が）気にくわない』などと、心穏やかでなく思って、見境なく忌まわしい姿にして（殺して）しまったのだろうか」とお思いになるにつけても、生きた心地がなさらない。（大殿は）今は、恋しく思ってお泣きになったことまでも一切しなくなり、茫然ともの思いに沈みなさってしまっているので、屋敷の中は、またこのこと（＝大殿がもの思いに沈んでいること）を嘆き（大殿の）世話をし申し上げる。

　尚侍も（御所から）退出なさって（里帰りし）、いつぞやの夕暮れ方、（大将が）おっしゃっていたことなどを思い出しなさるところ、「さては、これほどまでに（大将は）自分の身もここまでと諦めておられたのであるなあ。そうと知っていれば、その夜出かけさせなかったのに。自分も一緒に（家を出たい）と言わなければならなかった。幼かったときはたいそう疎遠であったが、このように（私が実家を）離れ出て（宮中に仕えて）からは、（実家との）行き来や、（出仕している春宮のもとへの）退出や参上の際にもそばにいて世話をしてくださったことは、まさに（大将が）私自身の光である気分がして、頼もしくうれしく思っていた。たった二人のきょうだいであるのに、行方をくらましてしまったとはひどいことだ。（しかしながら、大将は）男の姿で世間の人々と交流していたけれども、いろいろ考えてはっきりさせると、（一方では）女の姿で異性と交流しなさっていたわけであったが、今頃どのような世界に行って身を隠していて、どこの野山に行方をくらましておられるのだろうか。思慮分別があって、物を知っている様子であった大将であったので、女であるがこのように（家を出て行こうと自然に）思うようになった。（それにひきかえ、）男の身に生まれついた私は、幼かった時分こそ（男として）心の赴く方にまかせて過ごしていたものの、今はこのように（女の姿で）過ごしているために、（人々に）大切に世話をされて引き籠っているのは、いかにもあきれた情けないことである。殿の御身は（このままでは）お亡くなりになってしまうにちがいないように見える。（とはいえ、）殿ご自身は（役職がら）制約の多いご身分であるので、（大将を）捜索できるはずもないであろう。赤の他人はせいぜい、世間の評判程度に（探し）歩いてはいるようだが、本当に誠意をもって探してはいないようである。それに、あまりにも（大将が見つからない）といっても、この世の外のどこにいらっしゃるだろうか（いや、この世のどこかにいらっしゃるはずだ）。私はこのような姿（＝女の姿）ばかりではいられまい。男の姿になって大将を探しに行こうと思うが、どのような姿（の大将を見つけた）としても、（一度）探しに行ったとなれば、（二人）一緒に帰ってこようと思う。見つけられなかったとすれば、すぐに私自身も姿かたちを変え（出家し）て、山奥に行方をくらましてしまおう。殿の御身体は、（きっと私が何もしなくても）人々が自然とお世話し申し上げるだろう。長年、女としてかわいがられてきた私が、突然しゃしゃり出て、あれこれ指図しお世話申し上げることはできそうにもない。ただこのまま（＝女の姿のまま）、（大将に）死に遅れ申し上げて、私がこの世で生き延びていいはずもない」と、昼夜涙に沈んで、自分までがただいなくなってしまえば、世間の噂が異常に立つ（だろうが）、（臥せっている）殿に考えをお伝えになるようなこともたいへんなことであろうから、母上に不安げに説明申し上げなさって、「大将の行方がわかりませんことを、（きょうだいも）たくさんおりませんから、ひとしおひどく心細く悲しくてたまらないものであって、（さらに）殿がただもう（このままでは）お亡くなりになってしまいそうであるのを、男である身としてただこのように（手をこまぬいて）拝見するのは、とてもひどいことです。私は本来の（男の）姿になって、大将を、（私の）気のすむまでお探ししたいと思っております」と、いつになく、たいそう（男として）ふさわしい様子でおっしゃるが、母上は、「これはなんということよ」と、驚きあきれて、「いやいや。なんというお心変わりですか。か弱く、すっかり女の姿になっておしまいになっているあなたさまに、どこをお探しになることができましょうか（いや、できません）」と、ひたすら泣きに泣きなさる。